

本日も、熊本労災病院のHPを訪れていただきありがとうございます。

過ごしやすい季節となりました。朝の徒歩通勤の道すがら、彼岸花がちらほらと咲き、朝顔に似た青いすがすがしい花もみられ、汗をかかずに歩ける爽やかさを満喫しています。

今回も、新型コロナウイルス（結局、日本では、全世界が用いる、COVID-19の呼称は根付きませんでした）の話題で失礼します。熊本県内では少し落ち着き加減ですが、クラスターも発生し、なお慎重な対応が必要です。当院では面会禁止を続けてきましたが、6月ころの様に面会者の健康観察や人数制限はしつつも、禁止の規制は解除しました。長らく職員の会合も控えてきましたが、10人以内のこじんまりした職場の会合は自粛解除にしています。

当院では、熊本大学からの医学生実習をはじめ、隣の労災看護専門学校、その他、リハビリや検査、薬剤師、栄養管理など、多くの職場で実習受け入れをしています。今年は、感染リスクを避けるため、として、一時、ほとんどの実習が中止となりました。病院側は、「学生はウイルスを持ってくるかも知れない」、派遣する学校側は、「病院みたいに感染者が集まるところは危ない。一人でも感染したら大学の責任として厳しい非難に晒される」、という両者の思惑が一致した結果かと思えます。ようやく再開されつつありますが、なお感染リスクのある病院での実習を、医学生やその親が忌避するという信じがたい反応もあると聞いています。現場ではどう感染を防ごうとしているのか、現実を学生にも見知ってもらいたいと思います。現在でも、患者の受診前2週間以内の行動確認をしています。これを医学生や看護学生にやっていただいて、感染リスク軽減策の一端を考えてもらうことも有意義かと思えます。豪雨災害をうけた病院では、実習に積極的に来てもらって災害現場での医療を感じてもらおうようにしているということも聞きました。大学生だけ、対面授業の開始が遅れているという報道が少なくありません。2-3月頃の、感染学生やその所属する大学のバッシングが極めて激しく、そのトラウマが残っていてもおかしくありません。ただ、感染成立の環境や予防対応はかなり明らかになっており、学生自身も含めて対策を講じた上で、実習に限らず、貴重な対面授業を全面的に再開してあげてほしいと思っています。リモートは、知識は得られるかもしれませんが、教育効果はぜったいに対面には劣ります。

春先の第一波に比べ、感染者数に比べ、重症以降者や死者の割合は明らかに減少しています。「かかってもたいしたことはない」は、米国大統領が身をもって示した所でもあります。もちろん、感染症であり、無防備・無対策では感染者は増え、その数に応じて亡くなる方も増えるのは厳然とした事実です。米国東部、ハーバード大学があるマサチューセッツ州ボストンを源流とする、世界で最も権威ある週間総合医学雑誌、「The New England Journal of Medicine」では、最近、「Dying in the leadership vacuum」というタイトル(自訳：リーダーシップの欠落の中で亡くなること)で、この雑誌編集者の記事(Editorial)として、感染者数・死者数は中国よりも劣ることを明記し、「(大統領選挙で)指導者が今の仕事を継続することを許すことにより、さらにたくさんのアメリカ人が亡くなることになっては

いけない」、と記されています。この雑誌は、私も医学生のところから月遅れの船便で来る安い定期購読をしていましたが基本的には記事は有料です。この記事はネットで無料で入手できるようになっていました。この純粋な医学雑誌が政治的な論調を出すのはその 200 年の歴史の中で初めてではないかと言われていますが、おそらくまだウイルスを持つリーダーが密な群衆の前でマスクをはずす所作を、彼の国の医療者はどのような思いでみているのか気になっていたところでしたので、米国医学の最高権威の思いを垣間見た思いがして少し安堵しました。

インフルエンザの同時流行を想定して、行政もいろいろな施策で医療機関を援助しつつ、準備を整えようとしています。ようやく耳になじんだ、「帰国者・接触者外来」という言葉とその組織が無くなり、かわりに、「診療・検査医療機関」という名前で、クリニックや病院が時間を決めて、いわゆる発熱外来を時間を決めて設置し、医師の判断で検査も行うようになります。当院も、救急外来の外にプレハブを設置して、そこでこの外来を開くことになります。開設時間などは、まもなく県の HP で一括して開示される予定です。軽症者の全員入院措置も国の方針で変更され、軽症でも 65 才以上の高齢者や基礎疾患を有するかた、など以外は、原則、入院せずに隔離環境で過ごすことになります。PCR の結果をうけた無症状濃厚接触者や軽症患者が入院病床を占めてしまうことを防ぐ意味は大きいと思いますが、隔離の不徹底は心配されます。冬を越えたオーストラリアでは、インフルエンザがさほど出なかったという結果も知られていますが、警戒を怠らないようにしたいと思います。

といううちに、今年度も半分終わってしまいました。しなくてもいいことを省けたのはよかったです、やろうとしてやれなかったことも多い数ヶ月でした。感染の状態を横目で見ながら、対面や集合を要することを今のうちにやれればと思います。

寒暖の差が大きい日々です。普通の風邪にもどうぞお気を付けください。